



渚滑っ子

学校HPコード



教育目標：人間性豊かな児童の育成

～気付きをつなげる子どもの育成～

令和7年7月24日発行

文責：校長 木村 智史

継続したこと



明らかに変容しています。
登校して、まっすぐ畑へ行く子供たち。

雑草のない畑。
今年の7月の畑と比較してみましょう。



これは、「あいさつ運動」の個人評価の場面です。
児童会のテーマ「当たり前を当たり前」の実現に向けて、
あいさつ運動がスタートしました。

「どうして、こうなったのだろうか？」 子供たちに
気付かせたい事例です。



自分からあいさつをするきっかけとして、「行動に移すこ
とができたらスタンプを押す」という手段を取り入れたようです。
毎朝、子供たちの明るい声が聞こえています。
スタンプ票もいっぱいになっている子がほとんどです。

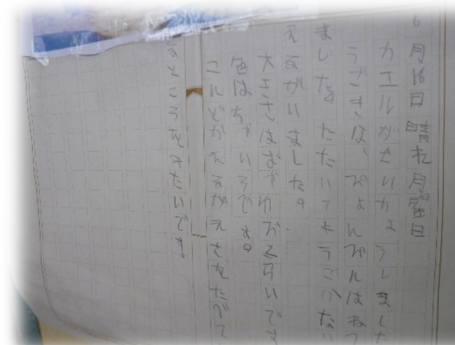
「もし、スタンプが押せなくても、あいさつは当たり前になるかな？」
と、問うたとき、子供たちは何と答えるでしょう。



高学年児童のノートです。
本時の課題について、自分の考えを書
いています。

ICTの利活用と同様、ノートに自分
の考えを「書く」という手段も忘れて
はならないと考えます。

作文を読むと、その時の心情が表れ
ています。



昔も今も (校長のつぶやき)

こんな経験がありませんか。

ゲーム、スマートフォンなど、流行のデバイスを我が子にねだられたこと。

その必要性を感じなかったり、家庭の考え（方針）を大切にしたりする根拠で、

「あなたには、買わない。」

と伝えた後、

「どうして？ みんな持ってるのに、なんで私だけ買ってくれないの？」

と、「みんなが持ってるから、私も持つべき」と反論してくるのです。

また、遊んでいたブランコで怪我をした子がいるから、使用禁止となったブランコ。

こうした風潮に、私は危惧していることがあります。

それは、「みんな」という抽象的な表現を使って主張を通そうとしたり、逆に、ごく一部の違反や事例により、便利な道具の使用を中止したりして、全体の活動に影響がおよぶことが多くなってきているということです。便利な道具には、当然リスクが存在することは自明のことです。

随分、過去のことですが、

「子供だけで、買い物に行ってはいけない」という夏休みのきまりについて、子供たちと話し合ったことがあります。子供たちのきまりですから、その必要性を感じて、問題提起してほしいという願いがありました。これを覆す「根拠と約束」があれば、学校全体で話し合った方がよいと思っていた夏休み前のある日、学級会で、「なぜ、子供だけで買い物に行ってはいけないのか？」と子供たちから質問がありました。私は、

「よし！ いいところに目を向けた！」

と感じ、児童会全体が動き出すかも…、と期待したのですが、子供たちからの主張は、

「子供だけでみんな行ってる。」

「みんな、子供だけで、〇〇に行きたいと思っている。」

という、理由付けでした。

数十年前、こんな事例もありました。

ある子が喧嘩の最中に、「カッター」を手にしてしまいました。後で聴取したところ、「驚かせようと思ったから…」と、自分の行動を振り返り、深く反省していました。

ところが、その後、学校がとった対応は、「カッター使用禁止」「私物のカッターは担任が預かる」というものでした。

結局、「カッター」が悪者になり、便利な道具としての機能を学習することなく、子供たちは道具（知恵）を学ぶ機会を失ったということです。

私は深く落胆しました。せっかく全体のものとして考えるきっかけができたのに…、せっかく失敗したのに…。「きまり」にしても、「使用中止」にしても、そうせざるを得ない背景があったのですが、大人たちが、「失敗を生かして、前を向いて新たなものを創りだそう」というベクトルになぜ向かなかっただろうと考えていました。そして、私自身、動ききれなかったことに自責の念を抱いたものでした。

「きまりは守るもの」ではありますが、「そのきまりは本当に必要なのか。もっと変えた方が機能的ではないか。」と常に変化させる視点が必要ですし、「使用中止」することだけが、本質の解決になるのだろうか…。と思うのです。

ネット社会により、事例は拡散され、場面の切り抜きにより本質がねじ曲がって伝わる時代。だれしも自分の言動で思わぬ反響が起こることを望みはしないでしょ。「みんながそうしてる」「危険だから使わせない」という、思考と行動がストップした状態のほうが楽だと判断するこの時代。私は危惧します。

学校と保護者がタッグを組み、どうしたら子供たちが強い心で何事にも立ち向かうスキルを育てられるのか悩み続けたいと思う今日この頃です。